

谷川連峰（たにがわれんぼう）には様々な植物や動物が生息しており、互いに捕食・被食の関係にあり、食物連鎖と呼ばれる連続的な捕食サイクルを生み出している。イヌワシはこの食物連鎖の頂点に立っている。イヌワシはニホンノウサギ、ヤマドリ、ヘビなど様々な動物を獲物としているが、天敵はいない。夏は標高の高い草地や低木地で、冬場は落葉樹の森で獲物を捕らえる。イヌワシや、その獲物となる動物の縄張りは広範囲にわたるため、イヌワシの個体数はその地域の生態系の全体的な健全度をはかる指標として使うことができる。このような役割を果たす種は「アンブレラ種」と呼ばれる。

イヌワシは、獲物を見つけるためその長い翼長を活かして気流に乗り、広範囲にわたって滑空し、空から狩りを行う。そのため、山地や森林地帯に生息することは珍しい。谷川連峰に生息するイヌワシは世界一小型で、そのサイズのおかげで木々の間を移動して狩りを行うことも出来る。またイヌワシは、つがい生活しながら繁殖や狩りを行い、谷川岳のイヌワシにおいては、森林地帯では協力して狩りを行うことも多い。

ここ数十年の間、日本に生息するイヌワシの個体数は次第に減少している。1991 年以降、巣立ちができるほど丈夫に成長した子ワシは全体のわずか 20 パーセントで、1980 年代以降著しく減少している。1950 年代初めに、木材の需要増加に対応するため数多くの植林政策が導入されたが、その需要がなくなると、その土地の多くは放置され、木々が生い茂った暗い森になり、イヌワシが生息できなくなってしまった。2003 年から始まった森林再生の取り組みである赤谷（あかや）プロジェクトの一環として、イヌワシが繁殖できる健全な森を作るため、スギとカラマツの植林地で伐採が行われている。

森を作りだしている木々や植物は、生息場所として重要なだけでなく、食物連鎖の基盤にもなっている。ブナの実ハリスやニホンザルなど様々な動物の生命を支えている。またブナの木から出た芽は、春になると黄色い花をつけ、その花は冬眠から目覚めたツキノワグマの大切な食糧となっている。木が枯れると、クワガタムシなどの昆虫が倒れた丸太に卵を産みつけ、腐敗した木は菌類の餌となる。